



じかっ



自立活動だより NO. 13

令和3年7月21日(水) 文責：佐方



どうしてトランポリンなの？ No.12の続き



③ 不器用なC君の状態像の背景を探る

C君の運動機能の問題は、一般的に「不器用」といわれる状態ですが、その背景に「姿勢の維持・調整機能」の未発達が大きくかかわっていることがうかがえます。

前回でも「姿勢の軸」がまっすぐに保てないから、回っている最中に左右に崩れてしまう状態になっているのです。また、縄跳びも、1回縄を回すごとに「姿勢」が前かがみになり、そのつど、からだを起こすのに時間がかかり、1～2回で止まっていたのです。

そこで、「姿勢調節回路」のほうにスイッチを入れるために、「大きな揺れ刺激」を使うこととしました。「落ち着いたA君」のときと原理的には同じです。したがって、「この平衡感覚の刺激、感じたよ」という本人の反応が引き出せるのなら、ブランコやハンモックなどのあそびでも同じような効果が出せることが多いです。



このように、C君の状態像の変化は、「筋肉を鍛えた」からではなく、「平衡感覚」の回路がつながったからこそ「姿勢の維持・調節」がしやすくなり、結果的にマット運動や縄跳びなどの「運動・動作・行動」がスムーズに行えるようになったと考えることができます。

(注釈：「落ち着いたA君」とは、本書で取り上げた別の事例です。)

◇ 不器用な子どもの行動理解

(引用：感覚統合療法入門講習会資料集)

ボール遊びやキャッチボールが苦手で、友達と一緒に遊べないことがあります。このような子どもによく観察されるのは、**動いているものを目で追うことや、いろいろなものの中から必要な物を見分けることが苦手**、人の身体の動きを見て同じように**模倣する**のが下手、身体全体あるいは各部分における**筋の緊張の極端な低下や高まり**が見られる、**身体を動かすと姿勢が不安定になりやすい、タイミングがとりにくい**などです。



では、実際にボールを受け取ることを想像してみてください。ボールを受け取るには次のような要素が含まれています。

- ボールに触ったり、転がしたり、受けとめたりして、ボールの大きさや感触を経験している。
- 動くボールを目で追える。
- 背景の壁や天井の模様、人の動きに惑わされずにボールを見失わない。
- 近づくボールを追って足が動き手が構えても身体は安定を保ってられる。
- ボールを受け取った時の両手の間隔などをイメージして構えられる。
- 近づいてくるボールと身体との距離を瞬間的に目測したり時間的に予測することができる。
- 手中にボールが触れた瞬間に、手や腕が適度な緊張をする。

キャッチボールができない、風船バレーで受けたり空中でたたくななどの動作ができないのは、これらの要素の一つあるいは複数ができないためだと思います。目でしっかりとボールをとらえ、受け取ることをイメージし、タイミングをあわせ、バランスをとりながら構えなくてははいけません。